

## 児童期の母親の具体的な関わりの時代差 — 女子大学生およびその母親の認知する被養育経験 —

三浦 香苗・田中 千穂

### Generational differences in childrearing described by female university students and their mothers

Kanae MIURA and Chiho TANAKA

This survey investigated if contemporary mothers bring up their children differently as a result of the drastic changes in values and living conditions following the Second World War, in comparison to how they were brought up. We asked university students and their mothers to describe their upbringing. Mothers also described how they raised their children. Data obtained from 91 female university students and their mothers were analyzed. Results indicated the following. (1) University students generally felt that they had been disciplined more severely during their childhood, whereas their mothers felt that they did not severely discipline their daughters. Moreover, mothers felt that they had been disciplined more severely than they disciplined their daughters in relation to the following behaviors: mingling with friends, disciplinary rules, encountering occupations, patience, good models, and motivation for learning. (2) The types of discipline that mothers stressed more in comparison to their own parents included the following behaviors: acceptance, acting together, emphasizing involvement, mingling with other families, encountering other cultures, behaviors fostering development, assertion, and motivation for learning. Conversely, role allocation, respecting parents, encountering occupations, and patience were far less emphasized than when they were young. (3) The students indicated that their mothers had disciplined them more than the mothers had realized in all the above behaviors, with the exception of mingling with relatives.

*Key words* : feelings about one's upbringing (被養育経験), discipline (しつけ), female university students and their mothers (女子大学生と母親の差), generational differences (時代差)

#### 問題と目的

最近の子どもや若者の行動特徴については、多くの人がある特徴と問題点を指摘している。その原因についても家庭・学校・地域の変貌などが挙げられているが、この論文ではその原因の一つである家庭でのしつけの実態について考える。前報告(田中・三浦, 2010a)でも書いたが、1950年頃に児童期にあった第1著者に対して家庭や地域社会あるいは学校が行ったしつけは、その後第1著者が自分の子どもに対して行ったしつけとは大き

く異なるものであった。それは食事作法や家事労働、きょうだいへの世話、あるいは悪いことをした時の対処法など多岐にわたる。そして、それは第1著者の子どもたちが、現在その子どもたち、つまり第一著者の孫たちに対して行っているしつけとは異なるものである。例えば、悪いことをした場合には、第1著者は口頭で注意されるよりも手で殴られたり、暗い物置に入れられるということがよくあったが、第1著者の子どもが孫たちにそのようなしつけをしたことは見たことがない。しかしながら、これらのしつけは、極端な場合を

除き、それぞれの時代状況の中で正しいとされたものを反映しているものと思われ、愛情を素直に表現するかどうかなどは別のこととして、いずれも親達の愛情と関心に基づいた行動であると推測される。

ところで、現在発達心理学分野で行われているしつけについての研究の多くは、その具体的な内容とは離れた親の対応の特徴を、例えば、酒井ら(2002)は親との信頼関係と学校適応との関係を、西出ら(1997)は家族システム機能と抑鬱感との関連を、信太(2009)はしつけの応答性と要求性を問うものである。それはそのしつけの与える効果として、子どもの心理社会的な発達や問題行動などの適応に大きな関心があるからである。日本の若者の社会的特性について、比較文化的に行われた研究(中里ら 1997)はあっても、その形成に家庭のしつけがいかに関わっているかなどの研究は筆者の知る限り極めて少ない。五十嵐ら(1971)の権威主義の形成過程の研究は、母子間の態度伝達を扱った珍しい研究がある。また、知的発達の日米比較において用いられたしつけについての考え方や項目(東ら、1981; Kashiwagi et al., 1984)は、その後しつけ研究の中ではあまり引用されない。それはどのようなしつけがなされているかということよりもどのような親子関係がそこで形成されるかに関心があるからである。その具体的なものとして家庭でのしつけが扱われていると考えられる。

しかし、子どもにとって、日々の日常生活の中で何が期待され、また、親は何をしてくれ、どのようなことを行うと褒められ罰せられるかは、子どもの日常行動には大きな意味を持つ。しかもそれは居住する社会の中で多くの家庭で当然とされ、認められて初めて強力な力を発揮する。現在、各家庭では、自分たちの考えに沿ったしつけがなされ、そこでの各家庭での特徴は認められる傾向にあるが、それはその時代で周囲で行われていることとは大きくズレてない範囲であることが多い。ずれている場合には、体罰、放任などとして非難される。この、現在の日本ではどのようなしつけがなされているかについての体系的な枠組みはない。

これに対して、教育界、特に社会教育の分野では、家庭教育の危機が問われ、家庭・地域・学校

教育機関の連携についていくつかの提言がなされている。例えば、第1著者も関わった国立教育政策研究所社会教育実践センターでは、Richard & Benson (2003)の発達資産の考えに基づき、現代の日本のこどもの健全な発達に必要な経験と資質についてまとめ、どのような経験と資質が重要であるか、またそれが現在欠けているかを調査報告している。そこでは、「子どもがまわりの世界から受け取る好ましい経験であり、……子どもの生活の構えに関係している」ものとしての外的資産と、「子どもの好ましい内部成長および発達を反映する特性や行動」を内的資産に分けて、日本の実情に合った形での発達資産の分類枠を提出している。しかし、そこでは、それぞれの具体的な項目の検討までには至っていない。

そこで、筆者ら(田中・三浦; 2009, 2010a, 2010b)は、昨年度から、主として家庭で行われているしつけを体系的に捉える試みを始めた。

まず、大学生に幼児期・児童期・思春期に母親からなされた記憶しているしつけのなかで、良かったこと、嫌であったこと、また、してほしかったことを尋ねてその実態を調べた(田中・三浦; 2009)。それらを上述の教育資産の考えに沿って分類し、外的資産・内的資産の8つの分類カテゴリーに属する158項目の質問項目を作り、大学生にそのようなしつけを小学校低学年期になされたかどうかの質問紙調査を実施した。それぞれの分類カテゴリー毎に、因子分析を行い、29の下位カテゴリーを抽出した(田中・三浦; 2010a, 2010b)。

本研究では、前述のしつけを測定する尺度を安定的なものにするとともに、現在の女子大学生が児童期に受けたしつけと女子大学生の母親が今からおよそ30年前に受けたしつけとの間にどのような差異が見られるか、また、母親が子ども時代に受けたしつけと実際に母親として現在の大学生の子ども時代に行ったしつけにはどのような差異がみられるかを明らかにする。

## 方 法

### 1. 調査対象および調査手続など

東京都内の私立女子大学生とその母親を調査対象とした。3つの専門教育科目の授業の受講生140名の女子学生に、以下に述べる学生向け質問

紙と母親向け調査用紙に調査の趣旨を同封した封筒を配布し、調査を依頼した。回収は、数週間後の授業時に学生と母親の回答を同一の封筒に封をして手渡す、または回収ボックスに入れるように依頼した。母親の協力が得られない場合には、学生だけの回答でも可とした。また、母親と同居していないことを申告した者には、別に封筒を2枚ずつ渡して、学生から親に郵送し、学生に返送されたものを学生のものと一緒に提出するように依頼した。

質問紙調査の依頼をしたのは、2010年10月上旬、回答締め切りは11月中旬とした。その後、数名の回収があったが、分析対象からは外した。

## 2. 配布資料（調査内容）

調査趣旨の説明書、学生向け質問紙、母親向けの質問紙の3種類からなる。

1) 学生向け質問紙 横向き of B4 版 2 枚の調査用紙に、以下の順序で提示した。

### (1) フェイスシート

まず、調査趣旨を以下のように示した。

「この調査は、家庭でのしつけが昔と今ではどのように変わってきたかを見るため、あなた方のお母さん方が子どもの頃受けたしつけとお母さん方があなた方にしたしつけについての比較検討をするためのものです。

そこで、あなたが小学校低学年の頃に（小学校1年生から3年生まで）、どのようなしつけや育てられ方をされていたかを教えてください。結果は統計的に処理し、だれがどう答えたかを明らかにするものではありません。」

その後、学科、学年、男女別のきょうだいの数と何番目かを尋ねた。

### (2) 子ども時代に受けたしつけ

前調査（田中・三浦：2010a, 2010b）では、予備調査および国立教育政策研究所社会教育実践センター（2006）の教育資産の考えによって、158項目を5段階評定で求め、非該当回答の多かった項目などを除外して因子分析をした結果、8尺度、合計下位29因子尺度を作成した（田中・三浦：2010a, 2010b）。今回はその中から、一定以上の $\alpha$ 係数のあった29下位尺度に関して、各3項目ずつをそれぞれ因子負荷量が高いもので、かつ内容的妥当性もあると思われる87項目を選択して採用した。

選択肢は、以下の5肢である。提示順序はラン

ダムとした。具体的項目は付表に示す。

当てはまる、よくされていた (5)、ややあてはまる、時々されていた (4)、どちらともいえない (3)、あまりあてはまらない、あまりされていない (2)、全然あてはまらない、全然されていない (1)

2) 母親向け質問紙 横向き of 調査用紙 B4 版 3 枚に示した。

### (1) フェースシート

「この調査は、家庭でのしつけが昔と今ではどのように変わってきたかを見るために、また、家庭によってしつけの仕方がどう変わっているかを見るためのものです。そのため、S女子大学の学生とその母親に同一の調査を実施する予定です。調査内容は、あなた（母親）が小学校低学年の頃に（小学校1年生から3年生まで）に受けたしつけについての質問と、あなたがお子さん（S女子大学の学生）の小学生時代に行ったしつけについての質問があります。」

と調査趣旨を説明の後、母親の男女別のきょうだいの数と何番目かを尋ねた。

### (2) 子ども時代に受けたしつけ

質問項目は学生に尋ねたものと同一である。

### (3) 子どもにおこなったしつけ

「あなた（母親）がお子さん（S女子大学の学生）が小学校低学年の頃に（小学校1年生から3年生まで）、どのようなしつけや育て方をしているかや教えてください。」

以下に多くの項目がありますが、それぞれの項目の後ろの（ ）で当てはまるものに○をしてください。

当てはまる、よくしていた (5)、ややあてはまる、時々していた (4)、どちらともいえない (3)、あまりあてはまらない、あまりしていない (2)、全然あてはまらない、全然していない (1)」

という教示で、59項目について尋ねた。この59項目は、前述の子ども時代に受けたしつけの29下位尺度から各2項目ずつを、親が子どもに行うしつけというように表現を変えたものである。具体的表現は、付表に括弧をつけイタリック体で示した。

## 結 果

### 1. 調査対象者の特性

140名に調査の協力を依頼し、回収されたのは、学生99名、母親91名であった。

学生の内訳は、心理学科16名、初等教育学科50名、社会福祉学科31名、不明2名であった。

学年は2年生81名、3年生9名、4年生5名、不明4名であった。きょうだい数は、一人（一人っ子）が9名、二人が54名、三人が31名、それ以上が2名、無記入が3名であった。一人の場合を含めて長子が52名、次子が34名、三子目が11名であった。

母親の特性の内訳は、きょうだい数は、一人が3名、二人が47名、三人が28名、それ以上が11名、無記入が2名であった。一人の場合を含めて長子は35名、次子が40名、三子目が10名、四子目が8名、それ以上も4名いた。

子どもである学生に比べて、母親の方が、きょうだい数が多いことがわかる。

これ以後の分析は、学生を対象にする場合は、上記の99名、母子の対応の場合には、91名を用いる。ただし、一部の質問に回答がない場合には、分析対象者は若干減少するが、最少の場合でも、80名以上である。

## 2. しつけ尺度の確定

### 1) 子ども時代に受けたしつけの因子分析結果

昨年度調査の結果採用された8尺度29下位尺度に採用された項目の中から、各下位尺度をよく表す87項目を今回実施した。尺度の確定のために学生データによる分析、母親データによる分析を行った。

分析は尺度ごとに主因子法・プロマックス回転で実施した。下位尺度として項目を採用する基準は、当該因子に.35以上、他因子に.30未満の因子負荷量であることとした。例として、学生のAの〔容認と支援〕尺度の結果を述べれば以下のとおりである。

項目選択の際に採用した下位尺度は、『受容・習慣形成・会話・ともに行動・関わりの重視』の5つであったが、因子分析では4因子解が抽出され、全分散の49.7%を説明した。第1因子は、『会話』の下位尺度の2項目と「家族のお誕生会をした」からなり、「親密性」と命名できる。第2因子は、『受容』として入れた全項目と「家では何でも思ったことを話せた」「ほうっておかれることはなかった」からなつたので、「受容性」と命名できる。第3因子は、『習慣形成』と同一の項目からなつたので、「習慣形成性」である。第4因子は『関わりの重視』の中の2項目と「豆

まきや七夕などの行事をしてくれた」からなり、「関係重視性」と命名できよう。これらの下位尺度の $\alpha$ 係数は、.821, .754, .698, .398であった。

同様にBの〔役割〕尺度に関しては想定4因子に対して4因子、Cの〔規範と期待〕尺度に関しては想定6因子に対して5因子が抽出された。

これに対して、母親データでの結果は、Aの〔容認と支援〕尺度では3因子解が抽出され、50.3%を説明した。第1因子は、『習慣形成』の3項目と『ともに行動』の2項目からなり「生活習慣形成」、第2因子は『会話』と『受容』の各2項目からなり「受容性」、第3因子は『関わりの重視』の3項目からなつた。同様に、Bの〔役割〕尺度では2因子解、Cの〔規範と期待〕尺度では3因子解が抽出された。 $\alpha$ 係数は、学生の結果のものよりは高いものであった。

このように、学生の結果と母親の因子分析の結果は、若干異なるものであった。また、各因子には、母親に尋ねた「あなたが子どもに行ったもの」が必ず含まれるということはなかった。そこで、今後の分析で、学生と母親が受けたしつけ、母親が受けたしつけと行ったしつけの対応などを行う必要があるので、今回は筆者らが最初に想定した8尺度29下位尺度をそのまま使用することとした。それぞれの下位尺度の $\alpha$ 係数は、付表に学生のもとの母親のものをそれぞれ示す。 $\alpha$ 係数は、当然のことながら、あまり高くないが、ごく少数の下位尺度を除き、.6以上であった。ちなみに.6未満の下位尺度は、学生では29下位尺度中7、母親では3であり、一般に母親の方が高い値であった。

### 3. 受けたしつけの母子による違い

表1に学生が子ども時代に受けたしつけと母親が受けたしつけの結果を、8尺度の下位尺度ごとに示す。数値は、各下位尺度に該当すると想定した3項目の評定平均値であり、括弧内に標準偏差を示した。また、学生と母親の平均値に差があるかどうかは、対応のある場合の平均値の差の検定で行った。

学生の方が親よりもより多くしつけられたと認知している下位尺度は、『受容・ともに行動・他家族との交流・将来の展望・文化との出会い・意思の主張』の6つである。逆に親である母親の方がより多くしつけられたと認知している下位尺度は、

表1 学生と母親が子ども時代に受けたしつけ

尺度	下位尺度	学生平均 (SD)	母親平均 (SD)	t検定値	有意性
容認と支援	受容	4.10 (.82)	3.67 (.88)	3.97	$p < .01$
	習慣形成	4.37 (.68)	4.29 (.81)	0.84	
	会話	4.16 (.86)	3.74 (1.03)	3.09	$p < .01$
	ともに行動	4.52 (.63)	3.74 (1.05)	6.44	$p < .01$
	関わり重視	3.89 (.77)	3.89 (.92)	-0.04	
役割	役割分担	3.51 (.92)	3.57 (.98)	-0.53	
	地域活動	3.92 (.94)	3.70 (1.06)	1.64	
	親戚との関わり	3.96 (.90)	3.72 (1.07)	1.71	$p < .10$
	役割遂行	2.94 (.82)	2.98 (.97)	-0.37	
規範と期待	慎重な行動	4.40 (.75)	4.24 (.79)	1.67	$p < .10$
	友達との交流	3.97 (.71)	4.37 (.68)	-5.52	$p < .01$
	他家族との交流	3.65 (1.02)	3.12 (.98)	4.15	$p < .01$
	整理整頓	4.25 (.73)	4.31 (.78)	-0.71	
	規律	4.02 (.74)	4.20 (.74)	-2.08	$p < .05$
	親への尊重	2.65 (.99)	2.72 (1.01)	-0.52	
多様な活動の場	職業との出会い	2.69 (1.00)	3.14 (1.12)	-3.19	$p < .01$
	将来の展望	3.48 (.94)	3.07 (.93)	3.06	$p < .01$
	文化との出会い	4.14 (.77)	3.19 (1.14)	7.17	$p < .01$
望ましい価値観	正しい行い	4.43 (.74)	4.33 (.79)	1.19	
	自立的態度	3.78 (.71)	3.70 (.79)	0.80	
	発達に応じた行動	2.88 (.85)	3.01 (.78)	-1.13	
望ましい自己確立	忍耐	3.15 (.91)	3.42 (.94)	-2.01	$p < .05$
	良いモデル	2.45 (.94)	3.71 (.81)	-2.13	$p < .05$
	意思の遂行	3.82 (.81)	3.71 (.95)	0.88	
社会的能力	意思の主張	3.38 (.76)	3.13 (.85)	2.07	$p < .05$
	明るい態度	3.07 (1.00)	3.07 (.92)	-0.03	
	良き品行	3.73 (.87)	3.62 (.97)	0.94	
学習への傾倒	学習への期待	3.87 (.88)	4.03 (.74)	-1.49	
	学習意欲	2.40 (.92)	2.94 (.97)	-4.12	$p < .01$

『友達との交流・規律・職業との出会い・忍耐・良いモデル・学習意欲』の6つである。学生の方が、親と友達感覚で接し、多くの社会的資源に触れ、自己を主張するように育てられているのに対し、母親は友達との交友が多く、規律を守り、良いモデルとして忍耐や努力、勉学を重視されていたことがわかる。母親が小学生時代を過ごした1970年代と学生が過ごした2000年代では親の子どもに対するしつけの重点が異なることがわかる。

#### 4. 受けたしつけと行ったしつけ

表2には、母親が現在大学生である子どもの小学校低学年時代に行ったしつけと自分が子ども時

代に受けたしつけとの結果を8尺度29下位尺度ごとに示したものである。子どもに対して行ったしつけの結果は上記調査内容の2) 母親に行った質問の(3)の「子どもに行った」しつけで尋ねた項目を集計したものである。各下位尺度は2項目からなる。母親が自分の子ども時代に受けたしつけは、行ったしつけに対応する項目を(2)の子ども時代に受けたしつけの項目の中から選択し、求めたものである。

多くの下位尺度で、母親が行ったしつけの方が子ども時代に受けたしつけよりも数値が高い。特に、平均値に.5以上の差のある下位尺度には、『受容・ともに行動・関わり重視・他家族との

表2 母親がおこなったしつけと受けたしつけ

尺度	下位尺度	行った平均 (SD)	受けた平均 (SD)	t検定値	有意性
容認と支援	受容	4.29(.70)	3.66(.89)	6.49	$p<.01$
	習慣形成	4.65(.53)	4.41(.76)	3.86	$p<.01$
	会話	4.06(.74)	3.69(1.10)	2.88	$p<.01$
	ともに行動	4.45(.63)	3.73(1.08)	6.23	$p<.01$
	関わりの重視	3.79(.87)	2.76(.90)	7.40	$p<.01$
役割	役割分担	3.37(.99)	3.49(1.08)	-1.05	
	地域活動	4.19(.88)	3.72(1.08)	3.86	$p<.01$
	親戚との関わり	3.95(1.01)	3.94(1.12)	0.05	
	役割遂行	3.18(.98)	3.03(1.07)	1.54	
規範と期待	慎重な行動	4.58(.63)	4.27(.85)	4.21	$p<.01$
	友達との交流	4.37(.68)	4.30(.68)	1.01	
	他家族との交流	4.19(.76)	3.52(1.05)	6.33	$p<.01$
	整理整頓	4.47(.70)	4.40(.76)	1.26	
	規律	4.21(.74)	3.82(.96)	4.14	$p<.01$
	親への尊重	2.58(1.02)	2.75(1.02)	-1.75	$p<.10$
多様な活動の場	職業との出会い	2.91(1.22)	3.06(1.27)	-1.20	
	将来の展望	3.61(.86)	3.24(1.01)	3.71	$p<.01$
	文化との出会い	3.90(.97)	2.96(1.21)	6.80	$p<.01$
望ましい価値観	正しい行い	4.55(.62)	4.35(.76)	2.72	$p<.01$
	自立的態度	4.05(.67)	3.74(.76)	4.2	$p<.01$
	発達に応じた行動	3.62(.86)	3.13(.94)	4.98	$p<.01$
望ましい自己確立	忍耐	3.21(1.08)	3.31(.96)	-1.02	
	良いモデル	2.62(1.01)	2.65(.94)	-0.34	
	意思の遂行	4.32(.71)	3.88(.97)	4.62	$p<.01$
社会的能力	意思の主張	3.99(.78)	3.24(.89)	7.50	$p<.01$
	明るい態度	3.33(1.08)	3.13(1.01)	2.29	$p<.05$
	良き品行	3.87(.87)	3.61(.94)	2.54	$p<.01$
学習への傾倒	学習への期待	4.45(.71)	4.21(.78)	3.30	$p<.01$
	学習意欲	3.47(.87)	2.89(.96)	5.40	$p<.01$

交流・文化との出会い・発達に応じた行動・意思の主張・学習意欲』がある。逆に値がマイナスの、つまり親から受けたしつけ以上には子どもに行っていないしつけには、『役割分担・親への尊敬・職業との出会い・忍耐・良いモデル』があるが、これらはいずれも有意ではない。子どもを慈しみ、楽しい生活を共にしている、しかし勉強だけは行ってもらいたいと願っている現在の母親の特徴が現れていると思われる。しつけるというよりも共に楽しむ姿勢が見て取れる。

##### 5. しつけについての学生と母親の認知の差

母親が行ったと認知しているしつけを学生はど

う認知しているかを見たものが表3である。母親が行ったしつけについては、上記の(3)子どもにおこなったしつけの結果、学生の結果は学生に対して行った上記1)の(2)「子ども時代に受けたしつけ」の項目の中で、母親に対して尋ねた「子どもにおこなった」の項目と対応するものを2項目ずつ選択したもので求めた。

29下位尺度中、母親が行ったと評定した数値が、学生が受けたと評定した値より1%水準で有意に高いものは11下位尺度で、評定値が.5以上高いものは、『習慣形成・友達との交流・規律・発達に応じた行動・意思の主張・学習意欲』の6下位尺度であった。逆に学生の評定値が高いもの

表3 母親がおこなったしつけと学生が受けたしつけ

尺度	下位尺度	行った平均 (SD)	受けた平均 (SD)	t検定値	有意性
容認と支援	受容	4.29(.70)	4.12(.82)	2.29	$p < .05$
	習慣形成	4.65(.53)	3.02(.45)	30.96	$p < .01$
	会話	4.06(.74)	4.03(.91)	0.29	
	ともに行動	4.45(.63)	4.46(.73)	0.22	
	関わりの重視	3.79(.87)	3.81(.89)	0.15	
役割	役割分担	3.37(.99)	3.42(1.02)	0.47	
	地域活動	4.19(.88)	4.04(.95)	1.30	
	親戚との関わり	3.95(1.01)	4.31(.90)	-3.73	$p < .01$
	役割遂行	3.18(.98)	3.13(.92)	0.24	
規範と期待	慎重な行動	4.58(.63)	4.41(.79)	2.10	$p < .05$
	友達との交流	4.37(.68)	3.76(.79)	6.76	$p < .01$
	他家族との交流	4.19(.76)	3.89(1.00)	2.62	$p < .05$
	整理整頓	4.47(.70)	4.26(.75)	2.36	$p < .05$
	規律	4.21(.74)	3.73(.90)	4.77	$p < .01$
	親への尊重	2.56(1.02)	2.53(.96)	0.24	
多様な活動の場	職業との出会い	2.93(1.15)	2.76(1.02)	1.35	
	将来の展望	3.61(.86)	3.42(.97)	1.72	$p < .10$
	文化との出会い	3.90(.97)	3.92(.95)	0.21	
望ましい価値観	正しい行い	4.55(.62)	4.42(.78)	1.68	$p < .10$
	自立的態度	4.05(.67)	3.78(.72)	2.98	$p < .01$
	発達に応じた行動	3.60(.86)	2.91(1.00)	5.61	$p < .01$
望ましい自己確立	忍耐	3.23(1.07)	2.93(.96)	2.30	$p < .05$
	良いモデル	2.61(1.01)	2.48(1.00)	0.99	
	意思の遂行	4.32(.71)	4.04(.83)	2.71	$p < .01$
社会的能力	意思の主張	3.99(.78)	3.41(.83)	5.40	$p < .01$
	明るい態度	3.33(1.08)	3.08(1.14)	1.75	$p < .10$
	良き品行	3.87(.87)	3.77(.87)	0.78	
学習への傾倒	学習への期待	4.45(.71)	4.01(.91)	4.49	$p < .01$
	学習意欲	3.47(.87)	2.30(.88)	9.15	$p < .01$

は、『親戚との関わり』の1下位尺度のみである。

母親は、子どもが社交性のある、健全な、しかも自己主張ができ、勉学意欲のある子どもに育つようにしつけを行ったと認知していることが推察される。

## まとめと討論

### 1. まとめ

戦後の高度成長期に子ども時代を過ごし、バブル時代に子どもを育てた、今の大学生の母親たちがどのようなしつけを受けたのか、そして自分の子どもに対してどのようなしつけを行ったのか、

そのしつけのもとで育てられた今の大学生は自分の受けたしつけについてどのような認識を持っているのかを調べた。

- (1) 調査対象者は私立女子大学の学生とその母親で、91対のデータを得た。学生のきょうだい数は二人が最も多く54名、三人が31名、一人っ子が9名であった。母親のきょうだい数は二人が47名、三人が28名、四人が8名であり、一人っ子は3名であった。母親の方がきょうだい数が多いことがわかる。
- (2) 昨年度の調査結果をもとに作成した8尺度29下位尺度については、学生と母親の別に尺度ごとに因子分析を行ったが、両者で因子

分析結果は微妙に異なった。そこで、その後の分析は最初に想定した尺度・下位尺度を用いて行った。

- (3) 小学生時代に受けたしつけに関しては、学生は、『受容・ともに行動・他家族との交流・将来の展望・文化との出会い・意思の主張』を高く評定し、母親は『友達との交流・規律・職業との出会い・忍耐・良いモデル・学習意欲』を高く評定した。
- (4) 母親が行ったしつけと自分が受けたしつけとの比較では、『受容・ともに行動・他家族との交流・学習意欲』などの多くの下位尺度で、受けた以上にしつけを行ったと判断している。逆に値がマイナスの、つまり親から受けたしつけ以上にはしつけていないものには、『役割分担・親への尊敬・職業との出会い・忍耐・良いモデル』があった。
- (5) 母親が行ったと認知しているものと学生が受けたと認知している下位尺度の比較では、『習慣形成・友達との交流・規律・発達に応じた行動・意思の主張・学習意欲』など11下位尺度で母親の評定値が高かった。学生の評定値が高いものは、『親戚との関わり』の1下位尺度のみであった。

## 2. 討論

### (1) 重点的しつけの時代差

表1で学生の方が母親の子ども時代よりもしつけられたと高く評定した『受容・ともに行動・他家族との交流・将来の展望・文化との出会い・意思の主張』の全下位尺度は、表2の母親が子ども時代に自分が受けたものよりも子どもである大学生にしつけたと評定している下位尺度である。これらの下位尺度が表している価値観は、戦後からのしつけにおいて、重点を置かれるようになってきたものと考えられる。逆に、表1で母親の方がしつけられたという評定している下位尺度、つまり『友達との交流・規律・職業との出会い・忍耐・良いモデル・学習意欲』の中には、重点の置かれなかった時代と共に衰退したものとそれ以外の項目が混在すると考えられる。『規律・学習意欲』は、母親の子ども時代の方がしつけられたと評定され、かつ母親は自分が受けた以上のしつけを大学生の子ども時代に行ったと評定されたもの

である。これらは、母親として子どもの成長に必要なだと思い、自分の子供時代に受けた以上のしつけを行っている徳目であろう。他の4つの下位尺度、即ち『友達との交流・職業との出会い・忍耐・良いモデル』は、時代の変化に伴い、重視されなくなったものと考えられる。

表1の学生と母親が子ども時代に受けたしつけでは差がないが、表2の母親が子ども時代に受けた以上のしつけを行った下位尺度として、『習慣形成・整理整頓・自立的態度・発達に応じた行動・学習への期待』は、時代の変化とは関わりなく、親として子どもの健全な成長に必要なと考えてしつけを行っているものと考えられる。

### (2) しつけを認知する親と子どもの違い

『親戚との関わり』以外の28下位尺度で母親が行ったという評定値は、子どもである学生のものよりも高かった。これは親のほうが子どもよりも意識的にしつけを行っていることを意味していると思われる。両者の値に大きな差が見られた『習慣形成・友達との交流・規律・発達に応じた行動・意思の主張・学習意欲』の6下位尺度は、親がかなり意識をしてしつけを行っていたものと思われる。これに対し、学生の値のほうが高い『親戚との関わり』は、なんの必然性もないと思われる祖父母、叔父・叔母、従兄弟などとお正月や種々な行事で接触を持つということは、印象深い出来事と認識しているためと思われる。

### (2) 尺度の妥当性・信頼性

今回の分析では、あらかじめ筆者らが想定したカテゴリー・下位カテゴリーに則って、尺度と下位尺度を確定し、分析を行った。その中途においては、学生および母親の資料に基づいて因子分析を行ったが、両者の間では必ずしも同一の因子は抽出されなかった。同一の因子が抽出されなかったということは学生と母親では因子構造が異なるということで解釈できるが、想定カテゴリーあるいは因子分析結果に基づく因子尺度のいずれにおいても必ずしも $\alpha$ 係数は高いものではなかった。今後、より簡潔に世代差や性差などを検討するためには、多くの調査対象者に通用する尺度の確定が求められる。

### (5) 調査対象者について

今回の調査は、ある私立女子大学の学生とその母親を対象にして行ったが、この結果はどの程度

まで一般化が可能であろうか。学習への期待や学習意欲に関して、学生は高い値を取っていないが、これは現在の学生一般に当てはまることであろうか。また、規律に関して母親は自分が子どものときに受けたよりも頻繁に指導しているとしているが、そのような母親であるから、この私立大学に入学させた可能性もある。これらの尺度をどういう理論的根拠で構成するかは今後考えるべき課題である。

### (3) さらに加えるべき検討内容

ここでは、3つの点を今後の検討課題として提示しておきたい。

1つは、現在の母親の親たち、すなわち、今の大学生の祖父母たちは、戦前に教育を受け、戦後の高度成長期に今の親たちを育てた世代である。彼らが受けたしつけは現在のものとは大いに異なるものである。3世代の比較をしていきたい。

第2は、子どもの特性との関わりでの検討である。個性が主張される中で、家庭によって、しつけの仕方や重点は多様化していると思われる。それが子どもの望ましい人格特性の発達とどう関わっているのかを検討していかなくてはならない。

第3は、母親がしつけの選択をするとき、どのような判断基準で選択しているのか、また、子どもはあるしつけをどう認識して受け入れたり拒否したりするのであろうか。これらの機制を明らかにしていかななくてはならない。

## 引用・参考文献

- 東 洋・柏木恵子・ヘス, R.D. (1981). 母親の態度・行動と子どもの知的発達：日米比較研究. 東京大学出版会.
- 五十嵐玉喜・岡田啓子・小口秀子・藤田美弥子・藤永保 (1971). 権威主義の形成過程—母子間の態度伝達—. 教育心理学研究, 19, 11-23.
- Kashiwagi, K et al. (1984). Japan-U.S. comparative study on early maternal influences upon cognitive development; A follow-up study Japanese

Psychol. Res., 26, 82-92.

- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター (2006). 子どもの成長過程における発達資産についての調査研究報告書 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター.
- 中里至正・松井洋編著 (1997). 異質な日本の若者たち—世界の中高生の思いやり意識—. プレーン出版.
- 西出隆紀・夏野良司 (1997). 家族システムの機能状態の認知は子どもの抑うつ感にどのような影響を与えるのか. 教育心理学研究, 45, 456-463.
- 姜信善・酒井えりか (2006). 子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連についての研究. 富山大学人間発達科学部紀要 1 (1), 111-119.
- Richard, L.M. and Benson, P.L. (2003). Developmental assets and asset-building communities; Implications for Research, Policy, and Practice. New York; Plenum Pub Corp.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原信介・北村俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応. 教育心理学研究, 50, 12-22.
- 信太寿理 (2009). 養育態度に関する中学生の母子関係の検討—母子関係の認知における不一致と性差に注目して— 家族心理学研究, 22, 65-78.
- 田中千穂・三浦香苗 (2009). 母親の養育態度に関する研究 I—学生の認知する児童期の母親の関わり—. 日本教育心理学会. 第51回総会発表論文集, p.216.
- 田中千穂・三浦香苗 (2010a) 大学生の被養育経験に関する意識の研究—児童期における母親の具体的な関わりについて—. 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 12, 143-157.
- 田中千穂・三浦香苗 (2010b). 母親の養育態度に関する研究—学生の認知する児童期の母親の関わり—. 日本教育心理学会 第52回総会発表論文集, p.322.

付表1 しつけ尺度別質問項目とその結果

尺度	下位尺度	提示順序	具体的項目	子ども 平均(SD)	母親(しつけた) 平均(SD)	母親(しつけられた) 平均(SD)	α係数
			( )内は母親へ項目				
A 容認と支援	受容	83	ひざに座らせたり、ぎゅっと抱きしめてくれた	4.15(1.00)			.680 (.729)
		58	(ひざに座らせたり、ぎゅっと抱きしめた)		4.03(1.03)	3.49(1.17)	
		44	私のことを第一に考えてくれた	4.05(.99)		3.82(1.02)	
		31	(子どものことを第一に考えた)		4.58(.76)	3.67(1.10)	
		11	元気がないときにはなくさめてくれた	4.22(1.04)			
	6	(元気がない時にはなくさめた)		4.33(.79)			
	習慣形成	19	食事のマナーを注意された	4.51(.72)		4.23(1.00)	.691 (.775)
		13	(食事のマナーを注意した)		4.56(.65)	4.06(1.07)	
		35	しなくてはならないことは早くするように言われた	4.06(1.04)		4.55(.79)	
		86	人に会ったら挨拶をするように言われた	4.65(.704)			
		61	(人に会ったら挨拶をするように言った)		4.73(.58)		
	会話	22	学校で起こったことなどをよく話した	4.40(.89)		3.84(1.07)	.774 (.852)
		29	食事中に学校で起こったことなどを良く話した	4.26(1.05)		3.70(1.18)	
		18	(食事中に学校で起こったことなどを良く話すようにした)		4.24(.78)	3.69(1.24)	
		71	家では何でも思ったことを話せた	3.92(1.07)			
		50	(家では何でも思ったことを話せるように気を使った)		3.85(.96)		
	ともに行動	32	豆まきや七夕などの行事をしてくれた	4.45(.84)		3.95(1.21)	.715 (.795)
		20	(豆まきや七夕などの行事をした)		4.44(.76)	3.53(1.27)	
		18	方々に一緒に出かけた	4.54(.76)		4.48(.73)	
		12	(方々に一緒に出かけた)		4.64(.65)	3.64(1.36)	
27		家族のお誕生会をした	2.04(1.10)		1.89(1.18)		
重視 関わりの	38	みんな忙しいので、食事は別々であった	3.61(1.31)	2.34(1.36)	3.62(1.41)	.380 (.280)	
	26	(みんな忙しいので、食事は別々であった)		3.97(1.29)	3.94(1.19)		
	4	一人で留守番させないように気をつけてくれた	4.03(1.05)				
	2	(一人で留守番させないように気をつけた)					
	48	ほうっておかれるようなことはなかった					
B 役割	役割分担	81	食事を一緒に作った	3.84(1.06)		3.57(1.14)	.768 (.735)
		56	(食事を一緒に作った)		3.56(1.08)	3.39(1.25)	
		42	洗濯物を干したり片付けたりした	3.22(1.25)		3.21(1.24)	
		29	(洗濯物を干したり片付けたりさせるようにした)		3.69(1.13)	3.69(1.27)	
		5	食事の後片付けをした	4.09(1.04)		3.78(1.19)	
	地域活動	43	地域の運動会やお祭りには一緒に行った	4.01(1.02)	4.30(.90)	3.67(1.17)	.820 (.814)
		30	(地域の運動会やお祭りには一緒に行った)		4.11(.99)	3.63(1.39)	
		39	地域のお祭りには一緒に参加した	3.71(1.19)		3.79(1.20)	
		27	(地域のお祭りには一緒に参加した)		3.57(1.16)	4.10(1.31)	
		25	地域の子供会活動には参加してくれた	3.99(1.21)		3.32(1.53)	
	親戚との 関わり	40	いとこなどとよく遊んだ	2.81(1.05)	2.87(1.05)	2.78(1.16)	.522 (.682)
		28	(いとこなどとよく遊ばせるようにした)		4.23(1.16)	3.32(1.53)	
		65	お正月などには、親戚が集まった	4.47(.96)		3.32(1.53)	
		47	(お正月などには、親戚が集まった)		4.23(1.16)	3.32(1.53)	
		24	祖父母が家に泊まりに来た	2.81(1.05)		2.78(1.16)	
役割遂行	46	皆で出かけるときには、自分がすることが決まっていた	3.45(1.07)	2.87(1.05)	3.28(1.26)	.670 (.717)	
	32	(皆で出かけるときには、子どもがする役割が決まっていた)		3.51(1.09)	2.95(1.28)		
	59	自分の分担をきちんとするように言われた	2.56(1.11)				
	41	(自分の分担をきちんとするように言った)					
	68	決められた仕事をするように期待された					
C 規範と期待	慎重な行動	85	約束の時間を守るように言われた	4.43(.82)		4.07(1.06)	.752 (.657)
		33	(約束の時間を守るようにしつけた)		4.55(.73)	4.47(.95)	
		1	翌日の準備は前日にすることを教えられた	4.40(.90)		4.50(.67)	
		7	(翌日の準備は前日にするようにしつけをした)		4.43(.90)	4.22(1.07)	
		50	知らない人には注意するように言われた	3.13(1.01)		3.11(.93)	
	交流 友達との	2	自分では気がない友達のいいところを話してくれた	4.37(.89)		4.06(.97)	.544 (.583)
		54	友達を大切にするように言われた		4.58(.69)	4.55(.76)	
		36	(友達を大切にするように言った)		3.65(.90)		
		7	友達とよく遊ばせてくれた	4.36(1.08)			
		5	(友達とよく遊ぶように言った)				
	交流 他家族との	56	友だちの家族と行き来があった	3.66(1.31)	4.13(.89)	3.48(1.28)	.725 (.656)
		38	(子どもの友だちの家族と行き来があった)		4.25(.78)	2.40(1.42)	
		20	友だちのお母さんと母親は連絡しあっていた	4.07(.95)		4.61(.87)	
		14	(友だちのお母さんと母親は連絡しあっていた)		4.54(.72)	4.18(.92)	
		26	親の友だち家族と一緒にキャンプや旅行をした	3.13(1.50)			
整理整頓	16	自分で学校の準備をするようにさせられた	4.38(.81)		4.61(.87)	.725 (.712)	
	10	(自分で学校の準備をするようにさせた)		4.40(.80)	4.17(1.18)		
	52	自分の持ち物の管理などに責任を持たされた	4.21(.87)		3.61(1.09)		
	35	(自分の持ち物の管理などに責任を持つように言った)		4.27(.97)	4.17(1.18)		
	70	家では靴を揃えるように言われた	3.35(1.10)		3.61(1.09)		
規律	21	道草をしないように注意された	4.14(1.12)	4.01(1.03)	4.03(1.13)	.482 (.734)	
	15	(道草をしないように注意した)		4.38(.81)	3.96(1.22)		
	33	朝起きたときや寝る前の挨拶をするように言われた	4.58(.81)				
	21	(朝起きたときや寝る前の挨拶をするようにしつけた)					
	45	家に帰るのが遅れそうときは、連絡するように言われた					
親への尊敬	60	「親のおかげで今生活できているのよ」とよく言われた	2.79(1.32)	2.78(1.26)	2.92(1.47)	.741 (.708)	
	42	(親のおかげで今生活できているのよ、と言った)		2.33(1.07)	2.59(1.08)		
	6	親を見習うように言われた	2.38(1.06)				
	3	(親を見習うように話した)					
	76	親に感謝するようによく言われた	2.98(1.26)		2.76(1.27)		

三浦・田中：児童期の母親の具体的な関わりの時代差

尺度	下位尺度	提示順序	具体的項目		子ども 平均(SD)	母親(しつめた) 平均(SD)	母親(しつめられた) 平均(SD)	α係数
			( )内は母親へ項目					
D 多様な活動の場	出会い 職業との	57	おじさんやおばさんの仕事について話してもらった		2.82(1.25)	3.13(1.30)	3.39(1.25)	.620 (.666)
		39	(おじさんやおばさんの仕事について話した)					
		63	おじいさんから仕事について話を聞いた		2.61(1.35)			
		45	(おじいさんから仕事について話をしてもらった)					
		10	親の職場に連れて行ってもらったことがある		2.75(1.45)			
	将来の展望	30	お父さんやお母さんの仕事についてよく話を聞いた		3.08(1.18)	3.37(1.07)	3.36(1.21)	.708 (.708)
		19	(お父さんやお母さんの仕事についてよく話を話した)					
		69	将来どんな仕事につきたいか聞かれた		3.73(1.27)			
		49	(将来どんな仕事につきたいか聞いた)					
	75	将来の夢について、家族で話したことがある		3.55(1.22)		2.74(1.08)		
	出会い 文化との	58	図書館や博物館などに連れて行ってくれた		3.68(1.17)	3.87(1.15)	2.68(1.36)	.534 (.770)
		40	(図書館や博物館などに連れて行った)					
73		名所などに連れて行ってもらった		4.26(1.04)				
52		(名所などに連れて行った)						
41		水泳やバレーなどのお稽古に通わせてくれた		4.56(.89)	3.94(.96)			
E 望ましい価値観	正しい行い	15	悪いことをしたときには、厳しく叱られた		4.51(.79)	4.53(.74)	4.45(.91)	.814 (.808)
		9	(悪いことをしたときには、厳しく叱った)					
		77	約束は守るように注意された		4.38(.91)			
		53	(約束は守るように注意した)					
		51	間違ったときは謝るようにしつけられた		4.46(.83)			
	自立的態度	13	自分で出来ることは自分でできるように言われた		4.19(.97)	4.42(.72)	4.20(.96)	.421 (.608)
		7	(自分で出来ることは自分でできるように言った)					
		8	小学生になったら、してもいいことが増えた		3.38(.94)			
		5	(小学生になったら、してもいいことを増やした)					
	74	ペットや草花の世話をした		3.8(1.21)	3.65(.90)	3.56(1.26)		
	発達に じた行動	72	仲直りをしたあとはそれをこたわらないように言われた		3.27(1.22)	3.59(.95)	3.23(1.22)	.532 (.408)
		51	(仲直りをした後はそれをこたわらないように注意した)					
79		貧しい国の子どもの話などを聞かされた		2.66(1.30)				
54		(貧しい国の子どもの話などを聞かせた)						
31		もう小学生だからとよく言われた		2.80(1.18)	3.61(1.17)			
F 望ましい自己確立	忍耐	64	つらくても我慢するように言われた		2.92(1.16)	3.13(1.23)	3.28(1.16)	.662 (.802)
		46	(つらくても我慢するように言った)					
		80	つらいときこそ努力するようにいわれた		3.04(1.20)			
		55	(つらいときこそ努力するように言った)					
		53	頑張れば報われるといわれた		3.61(1.15)			
	良いモデル	61	友達の見本になるようにいわれた		2.28(1.06)	2.30(.99)	2.31(1.06)	.803 (.713)
		43	(友達の見本になるように言った)					
		87	皆からほめられるような人になるように言われた		2.83(1.19)			
		62	(皆からほめられるような人になるように言った)					
	67	人に自慢できるものを持ちなさいと言われた		2.45(1.14)	2.91(1.25)	2.90(1.21)		
	意思の遂行	62	一度やるといったことはきちんとやるようにいわれた		3.70(1.04)	3.98(1.05)	3.59(1.12)	.701 (.820)
		44	(一度やるといったことはきちんとやるように言った)					
47		約束の時間を守るように言われた		4.39(.96)				
60		(約束の時間を守るように言った)						
28	一度決めたことは貫き通すように言われた		3.39(1.02)	4.57(.69)	3.40(1.12)			
G 社会的能力	意見の主張	55	言いたい事は言うように言われた		3.59(.89)	4.03(.85)	3.39(.99)	.663 (.820)
		37	(言いたい事は言うように言った)					
		84	不愉快なことやいやなことははっきり言うように言われた		3.32(1.11)			
		23	どんなふうを考えているのかを聞かれた		3.29(1.02)			
		17	(どんなふうを考えているのかを質問した)					
	3.90(.91)		3.06(1.02)					
	明る い態度	37	元気で明るく振舞うようにいわれた		3.11(1.18)	3.23(1.09)	3.03(1.06)	.849 (.845)
		25	(元気で明るく振舞うように言った)					
		36	いつも笑顔でいるように言われた		3.13(1.24)			
		24	(いつも笑顔でいるように言った)					
	12	自分から人に話しかけるようにと言われた		3.10(1.08)	3.42(1.10)	2.97(1.05)		
	良き品行	34	友だちの悪口は言わないように言われた		3.63(1.03)	3.94(.85)	3.49(1.06)	.695 (.832)
22		(友だちの悪口は言わないようにしつめた)						
14		暴力をつかわないように言われた		3.99(1.10)				
8		(暴力をつかわないようにさとした)						
3	いじめることははずかしいことだと言われた		3.63(1.18)	3.75(1.27)	3.69(1.08)			
H 学習への傾倒	親の学習への期待	17	熱心に勉強していると親は嬉しそうであった		3.77(1.14)	4.34(.82)	4.01(.95)	.775 (.735)
		11	(熱心に勉強していると親は嬉しかった)					
		49	成績が上がると親は喜んでくれた		4.33(.86)			
		34	(成績が上がると喜んだ)					
	9	親は学校での勉強に関心があった		3.59(1.10)	4.58(.75)	3.68(1.01)		
	学習意欲	66	勉強が好きであった		2.45(1.15)	3.49(.98)	3.10(1.09)	.757 (.837)
		48	(勉強が好きになるように配慮した)					
		82	大人から勉強の話をされるのがうれしかった		2.11(1.06)			
57		(勉強の話をよくした)						
78	勉強に熱中するほうであった		2.65(1.26)	3.45(1.05)	3.13(1.16)			